

橋のない川 第四部

住井すゑ



橋のない川

第四部

住井すゑ

新潮社版



© Sue Sumii
Printed in Japan, 1964

橋のない川 第四部

昭和三十九年四月三十日 発行
昭和四十九年七月二十日 五十八刷

定価五〇〇円

著者 住井 亘

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話
業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四一一
郵便番号・一六二 振替・東京
八〇八

印刷 株式会社 金羊社
製本 神田加藤製本所

乱丁・落丁本は、御面倒ですが
小社通信係宛御送付下さい。送料
小社負担にてお取替えいたします。

長篇小説 橋のない川 (4) 目次

若竹	五
勲章	三
井伊大老の首	五
餓鬼談義	九
風	一〇
早春賦	一四
火のある火鉢	一七
穂麦	二〇
蜘蛛	二三
黎明	二四
あとがき	二六

装
幀・関
野
準
一
郎

橋のない川

第四部

若 竹

一

国八の家では、ことしも七月二日の半夏生に、祝いの小麦餅を擣ついて職人たちにふるまった。

小麦餅はめいめい皿にとり分け、豆の粉（きなこ）をまぶして食べるのが習わしで、源吉と民夫は、はじめの二三杯はものも言わずに平げた。小麦餅は夏の食べ物らしく風味が淡白な上に、二人とも日ごろの粥食で胃袋が拡張ひらっていることとて、なかなか満腹感が来ないのだ。

岩造小父さんは小首をかしげて、

「源も民も大丈夫かや？」

いうまでもなく、胃袋が破裂はくしないかとからかっているのだ。

源吉はぺこんとおじぎして、

「叔父さん、えらい心配かけて、すまんナ。」

「だけど、わしから見たら、お前ら、まだ子供やさかい、そら、心配するがな。」

「おおけに。おおけに。やっぱり叔父さんや。ふだんはあかぬが、祇園やいうとあんじょう気がつく。そいじゃ、なんぼでもええワ。呉れるだけもろとくがな。」

民夫もすかさず、

「口で心配してるひまに、十円札の一枚も祇園の小づかいにお呉れてみ。したら小父さんの値うち、一ぺんに上るで。」とからかいかかる。

岩造小父さんは小鼻をうごかして、

「お前ら、さすがに産んでくれたお母んがええだけに、胃袋も丈夫なら、頬ほ（無駄口）も達者や。けど、達者なのはそれぐらいにしとけヨ。去年みたいに、酔うて達者にあばれたら、ことしや、どないな騒さわぎになるかわからぬど。旦那はんかて、ことしはもう、構かまうて呉れはらぬワ。」

「そのことなら、なんぼ阿呆かてよう承知してる。安養寺さんの竹も、あのとおりまだ若いこっちゃし。なア、民やん。」

「せやがな。あれでは、いざとなっても、伐きって竹槍にするのはむりやでな。」

「せやから、わしも民やんも、ことしはなんぼ腹が立ったかて、じっと辛抱してるがな。その駄賃に、叔父さんも芳さんも、祇園の小づかいお呉れてもええやろ？」

「ほんまに、よう出る頬ほや。あははゝゝゝ。」

小父さんにつれて芳松も笑い、孝二も笑った。

安養寺の竹やぶが、数本の親竹のこしに伐り払われたのは去年の八月七日だった。以来、小森の人たちは、新しい傷口にふれる思いでからの竹やぶを眺めてきた。それが先月のはじめごろからぼつぼつ筍が見えはじめ、降りつづく雨の中で伸び育ち、今では眼も鮮かな若竹の群を成している。それは平凡な自然の営みで、特に眼をみはるものはないのかもしれない。けれども孝二は、さやさやと風にこたえる若竹の葉ずれにも「奇蹟」を見る思いがする。源吉や民夫が、竹槍にむりや」などとおどけて言い合うのも、やはり共通な思いが、心の底を流れているからではあるまいか？

さて、振るまいのご馳走で快く満腹した源吉は、さっそく国八に向いて、

「旦那はん、えらい勝手ですみまへんけど、きょうは半ドンにさしてもらいとはんネ。」

「旦那はん、わしもや。」と民夫もいう。

「あ、ええとも、ええとも。」

国八はものわかりよくうなずいて、「年に一べんの半夏生や。半ドンにでも丸ドンにでも、お前はんらの好きにしていええがな。」

ドンタクとはオランダ語で日曜日のことだと、孝二は曾て松川の高等小学在学当時、級友の里村恒太郎に教えられた。そして日曜日は学校が休みのところから、ドンタクは

休日の意になり、更に半日休みは半ドン、一日休みは丸ドンとして通用するようになったのだと恒太郎は言った。その時恒太郎を取り巻いていた級友たちが、そろって感心顔にうなずいたのも、孝二は未だにおぼえている。しかし、半ドンの語も丸ドンの語も、孝二たちの間では殆んど使われなかった。

ところが源吉と民夫には、それは耳なつかしい言葉だった。二人とも学校の門をくぐったのはほんの僅かな日数だが、その頃の坂田尋常校では、松川の高等小学校とは反対に、土曜、日曜とは言わずに、みんな半ドン、丸ドンで通していた。今でも半ドンと言ひ、丸ドンと聞くと、二人の胸には、その僅かな通学期間がよみがえる。もっとも、そのせいというわけではあるまいが、民夫は少年のように調子づいて、

「旦那はん、せっかく言うとかんはるのやけど、丸ドンだけはあきまへん。そうかて、わしら、もう半日だけ仕事しましたもん。今からでは、なんぼ気張ってみたかて半ドンや。あはははは。あはははは。」

「だけど、民。お前はんら、去年は丸ドンどころか、夏休みほども高田の別荘でゆっくりしてきたやないか。せやから今年の祇園かて、まだまだどうなるか、わかったもんやあらへぬで。」

冗談を返して国八も笑った。

「旦那はん、そんなン、殺生や。」と民夫は頭を掻いて、
「去年は酒で失敗しじやうしましてン。それに去年と今年では、もうわけがちがいます。なんぼシャブシャブお粥おがゆさんかて、一年食うたら、食うただけの分別、つきまんがな。せやからきょうあたり、正坊しやうぼうんをあずけてもちろたかてだいじだいじ（氣づかい）おまへんで。」

折から、＼ただいま！と正太が学校から帰ってきた。その偶然がおかしくて、とよ（正太の祖母）もつや（正太の母）もふき出した。

正太は肩の鞆たもとを外しながら、

「なに、笑うてんネ？」

「あのな、正太。」と、とよは笑いを重ねて、「源さんと民さんが、正太を祇園ぎんさんに連れて行てくれるのやて。」

「ほんまにか？」

「ほんまにや。」

貞夫が言った。

「ふゝむ。」と正太は上眼うしやんづかに暫く源吉と民夫を見くらべていたが、

「そら、面白いな。」

つやは少しあわてて、

「なにが面白いの。」

「そうかて、源兄げんあにやんは、またきつと祇園さんであばれるもン。」

「まア、そんな阿呆あほう、いうて……。」
だが、強面きやうめんに言う口の下から、つやはまたしてもふき出した。

「だけど、正太がいうの、そらほんまやで。祇園さんのみこしかて、あばれ廻まわるさかい面白いネ。もし葬むすぶ斂しんの棺桶くわんぼくかつぐみたいにおとなしゅうかついどつてみ、誰があんなもん、見に行くもんけ。人間はみなあばれるのが好きやし、それを見るのもまた好きなもんや。」

国八は一旦言葉を切って、

「正太も、あばれるの、好きか？」

「うん、好きや。」

「じゃ、正太も大けなったら、源さんや民さんに負けぬとあばれるか。」

「ううん、わし、今かてあばれたるで。おじいやん。」

「そら、えらい。あばれもせぬと、学校から泣かされて帰ってくるような弱虫じやくちゆうではあかぬものう。」

「けど、あんまりあばれると、優等ゆうとうになれへぬで。」

笑いをかみ殺して敬一けいちが言った。

正太は小麦餅こむぎもちにかぶりつき、一つ大きく首をふる。父親の言葉を否定しているのだ。

敬一はいささか腑はらにおちかねて、

「あばれると、先生に叱しられるやろが？」

「ううん。先生はな、あばれとなったら、なんぼあばれて

もかまへぬ、言わはってん。」

「そんなン、嘘や。なんで先生が、あばれてもかまへぬ、なんて言わはるもんけ。」

「けど、ほんまに言わはってん。」

「どの先生が言わはってん？」

「わしの先生や。」

それだけでは足りなくて、正太は声を高めて言い添えた。

「杉本まちえ先生や。」

「そいじゃ、正太はきょうも学校であばれてきたのけ？」

笑いを含んでとよが言う。

正太は大急ぎに口の餅をのみこんで、

「ううん、おばあちゃん、わし、学校ではちっともあばれへぬで。そうかて、学校、面白いもン。」

国八は「なるほど」とうなずいて、「学校が面白けりや、そら、あばれること、要らぬわの。あばれるのは、あら、みな、何かと面白くないからや。学校にしたかて、祇園さんにしたかて。あはははは。」

「やっぱり旦那はんは、あんじょう言うとうくなはる。ほんまに、そのとおりや。」

源吉は顔の汗をふいた。国八にきまじめな表情を見られるのが、かえって気羞かしかったのだ。

敬一はだまって正太の頭をくるくる撫でる……。学校が

面白いという正太。通学がどんなにかたのしみな正太。だが敬一は、いつまでそれがつづくことかと不安だし、また一方、いつまでもそれがつづいてくれるようにと祈らずにいられないのだ。

それはつやとて変るいわれがない。彼女は曾て実弟の和一がしたように、正太も今に毎日ナイフをふところにして通学するようになるのではないかと、ひそかに怖れてもいるのだ。それだけに、受持ちの杉本先生がありがたくて、つやは思わず口にした。

「正太は、ええ先生にあたってしあわせや。先生は、貞夫兄さんや、孝二兄さんの友達やねで。」

「うふふ。うふふ。」

正太は貞夫と孝二を見くらべて笑った。今更母親に言われなくても、十分心得ているといった表情で――。

ところで、正太はこのごろ「杉本まちえ」と正確に書ける。大好きな先生なので、特別に練習しておぼえこんだのだ。そして先生の名まえが正確に書けることで、正太はますます杉本まちえ先生が好きになり、ことごとに先生の自慢をひろうした。

そんな正太を見ると、孝二はうれしいともつかず、悲しいともつかず、いき苦しく胸がふさがる。曾て孝二も受持ちの柏木先生が好きだった。けれども孝二は口に出しては誰にも言わなかったし、言えもしなかった。孝二は大

好きでいながら、常に先生から遠ざかるうとする矛盾を胸の中に秘めていた。ある時も「孝二さん」と先生が頭を撫でて話しかけてくれたが、孝二はただもう、身体が疎むようにはずかし、先生の袴のひだを見ているうちに涙がこぼれた。そして後になっても、その時のことを思い出すと、やはり涙ぐまずにいられなかった。

その点、杉本まちは、孝二とはまるで逆だった。まちは、自分から柏木先生の肩にとびついたり、袴の紐にぶら下ったりして、わがもの顔にたわむれた。孝二はそんなまちはが羨ましく、ねたましく、そしてなんとなく怖かった。もし明治天皇の「ご大葬」の夜がなければ、孝二には今もってまちはは怖い少女だったかも知れぬ。

「そいじゃ、よばれ立ちしてすみまへんが。」

源吉が中腰で言った。

「孝やんもどうけ？」と、民夫も誘い顔に言つて膝を上げる。

「まア、遠慮せぬと二人で仰山遊んできとくなはれ。出来たら、わしの分も。」

孝二は笑つて、一人で仕事場に立った。すると間もなくつやが追つてきて、

「孝二さんもきょうは半ドンにしたらよろしやないの。岩さんらも休むていうてさかい。それにお姑はんが、この小麦餅、ちよつとやけど、孝二さんに持つて帰つてもらい

たい言うてまんネ。」と言う。

小麦餅はぬいもふでも好物だった。しかし、搗くのに手間も費用もかかることから、孝二の家ではめつたにこころみることがない。

「じゃ、遠慮なしにもろて去にまっさ。」

孝二はつやの手から重箱包みを受け取つた。ちようどそこに貞夫が顔を出して、

「孝やん、こんや、祇園さんにつき合ひ、したろけ。」

「いいや、結構や。」

というのは、こんや高田の祇園に出かけるつもりがないことを意味しているのだ。

貞夫はそれとさとして、

「じゃ、孝やん一人で、そつと愉しんでくるつもりやな。」

と冗談をとばした。

「せやとも、他人にたのしみを分けたるのは借しいさかいな。」と孝二も返す。

「ははゝゝゝ。だいぶ心得てきたな。でも、孝やん。」と貞夫は急に声をおとして、「こんやあたり、ひよつとしたら、町でばつたり出会すかもわからぬで。いや、うしろ姿をおがむだけでも結構やないけ。」

「なーんや。目的はそれけ。」

「あたりまえや。八坂さんの、スサノオノミコトになんか、なんの用もあらへぬ。」

「けど、貞やん、先生というのは、ああいう場所にはあんまり出て行かぬもんやで。」

「いいや。そうとも限らぬ。わし、子供のじぶん。一ぺん祇園さんと柏木先生に会ったおぼえがあるで。もつとも、先生に見つかるのが怖うて、さっさと逃げてしもたけだな。」

「今夜かて、そのくちやないかな。そうやとつまらぬさかい、やっぱり、やめとくワ。」

「そんなこというて、一人で歩いてしもたらあかぬで。」

「大丈夫、行く時は誘うがな。」

「じゃ、待ってるさかいな。」

「あ、待ってて。」

孝二は重箱の包を持ちかえた。その顔面に微笑がひろがる……。他愛もない喋舌の中に、互いの意志が疎通すること、孝二にはなんとも言えずおかしかった。そして孝二は、ぐうしろ姿をおがみに出かける時刻まで、もう心のなかに決めていた。

二

小森を出外れると、祇園祭の囃子太鼓が正面から迫ってきた。太鼓の音色が冴えているのは、ここ当分快晴がつづくからにちがいない。思い成しか、青田を渡る夕風もからりとして、盆地には珍しい乾きぶりだ。

お月さん
空の

ひとり旅

おなが

空いては

あるけまい……

正太と熊夫は行く手の空に向いて声を張り上げる。空には月がかかっていた。五日月だった。

「そら、ええ唱歌やな。」

貞夫がほめた。

正太は首を振って、

「これ、唱歌とちがうで。」

「じゃ、なんやネ。」

「どうようや。」

熊夫がこたえた。そして正太と二人で更に歌いついだ。

お月さん

前に

いわし雲

お月さん

横に

とびの魚

おなが

空いたら

召しあがれ

「童謡か。道理で、なんやらハイカラでええ思うた。」

また貞夫がほめた。

正太は月を指して、

「貞兄やん、見てみ。お月さんかて、どうふう、好きやネ。せやさかい、さつきからわしと熊ちゃんの方ばかり見たはるネ。」

「あははゝゝゝ。正太はうまいこと、言うな。」

「そうかて、ほんまや。」

すると、こんどは熊夫が言った。

「わし、どうよう、大好きや。せやさかい、ようけいこして、一人で歌うたるネ。ようけいこした者には、一人で歌わしたるて、先生、言わはってン。」

「そいじゃ熊ちゃんは一人で歌うてみたいのけ？」

「うん。」

「やっぱり熊ちゃんは元氣があるなア。けど熊ちゃん、一人で歌うて、もし下手やったらはずかしやないけ。」

「せやさかい、わし、ようけいこするネ。」

「貞兄やん、わしかてや。」

胸を張って正太もいう。「わしかて一人で歌うたる。そうかて、一人で歌わぬと、上手やら下手やらわからぬもン。」

「孝やん、わしらの時とはえらいちがいや。わしはいつかて指されるのが羞かしうて首をすっこめてたもんやのに。」
小学生のころ、唱歌が一番の苦手だった貞夫は、そう言
つて思わず苦笑した。

孝二はそれほど唱歌はふいではなかったが、しかし杉本まちえには及びもつかなかった。今も教室で習った歌の
大方が、なつかしく胸の中にいきづいてるが、それは杉
本まちえの柔かな声で持ちこまれたからだ。そのことは、
貞夫はもちろん、級の誰彼とて変わるところがないように思
われる……。

さて、草深い小森の細道は、やがて幅広い高田街道に結
びついた。

祇園囃子は、白く乾いた街道を一直線に流れて、みんな
の足を浮き立たせる。

正太と熊夫は肩を組んで再び声を張り上げた。

お月さん

空の……

けれども歌はそこで切れた。

瞬間、孝二は気がついた。杉本まちえだった。まちえ
は、母親らしい年輩の婦人を右に、弟らしい少年を左に、
小早い足どりで向いてくる。そのすぐうしろに、四五人つ
づいて見えるのは近所の婦人たちでもあるうか。一団は、
はや祇園詣りをすませての帰り足なのだ。

孝二は心に狼狽を感じた。『しまった！』という念いが胸を駆けめぐる。だが、東西にのびる一本道。もとより避けられるわけのものではない。

「センセエ——」。

正太はそれと確認して声を上げた。

「センセエ——」。

負けじと熊夫も叫ぶ。この偶然の出会いに、正太も熊夫も有頂天なのだ。

孝二はまちえの袖がひらひら動くのを認めた。

貞夫はくすくす笑って、

「孝やん、きょうは祇園の神さん、えらい気をきかつしよったで。」

「……………」。

孝二はだまって道の右端を歩いた。

空は朱を流したように夕焼けて、道の辺の青田をばら色に染めている。夏独特の自然の華やぎだ。だがそうした自然の華やぎも、今の孝二にはかえって心の負担になる。孝二は夕映えの明るさの中に、我が身が全裸で投げ出される思いがするのだ。

「孝やん。」

また貞夫が呼びかけた。

孝二は依然、うつ向きがちに道の端を歩いた。孝二はそのまま、まちえとすれ違ってしまうつもりだった。ところ

が——。

「正太さん。」とまちえは足を停めて、「これから祇園さん？」

「はい。孝二兄やんも、貞夫兄やんもいっしょだんネ。」

「まあ、いいわね。」

まちえは正太と熊夫の頭を撫でた。

貞夫は帽子をとり、小腰をかがめて、

「正太や熊やんが、えろうお世話になりました……。」

「あら、一向にとどきまへんのよ。」

すると母親らしい婦人も、

「なにをいいますにも不なれなもので、とどかぬことばかりや思うてますネ。これからもよろしうお頼み申します。」
と言う。

「いえ、いえ、えらいお世話になって、みなよろこんでまんネ。」貞夫は落ちつき切っている。

孝二は逃げるように高田に向いて歩いた。自転車が一、二台、ベルを鳴らしてすれちがって行った。

孝二は自転車を見かえるように振り向いた。まちえの締めた帯柄の緋色が瞳にしみる……。孝二は不意に眼瞼がくもった。

ところで、やがて孝二に追いついた貞夫は、「なんやネ、孝やん。」となじり気味に言った。「せっかくのええ機会やのに、ものも言わぬと逃げてしもて。」

「そうかて、別に用はないもの。」

「そんなこと言うても、このわしには通らぬで。」

「けど、貞やん。」

「もうええ。聞かぬかてわかつた。孝やんはあの顔見るのが怖いやら、羞かしいやらで、そいで逃げてしもたや。」

「……………」

「たしかにそうやろが？」

「そうやない。」とは言えなかった。孝二の内には、面と向き合うのを怖れる気持ちもあれば、羞かしいと思う気持ちもあった。だからこそ、それがまぢえとわかつた瞬間、「しまった！」という念いに駆られたのだ。だが正確に言くと、それは恋しい人を「見る」ことの怖れでもなければ羞かしさでもなく、実は恋しい人に「見られる」ことの怖れであり、羞かしさだった。それというのは、孝二はまぢえの前に立つ時、恐らくまぢえの視線に「晒される」思いがするにちがいないからだ。

もう、だいぶ前のことだが、孝二は従兄の和一が言ったのをおぼえている。

「村上君（秀坊）は、命をかけるほど好きなお嬢さんが居てたのに、自分から逃げ出してしもた。あわれなものや。」

その時、孝二は秀昭のために残念に思うより、むしろ齒

痒さを感じた。だが、今にして孝二はわかる。秀昭もやはり恋しい人の視線にわが身を晒す思いがして、遂に堪えられなくなったのだ。

「孝やん。」

もう町の入口だった。貞夫は肩を寄せ、声を落して、

「わし、正直なところ、今でもまぢえに貸しがあるみたいや、また借りがあるみたいや、妙な気持ちでして、いや、ないネ。これは孝やんにもわかるやろ。」

「そら、むろんわかる。借りがあるにしても、貸しがあるにしても、その原因は自分やもんや。」

「いや、わしはそういう意味で言うてるんやないネ。それに、まぢえを擲ったのはわしの責任で孝やんの知らぬこっちゃ。とにかくわしは疾うからええ機会みて、心の借り貸しを清算しよう思うてン。」

「その機会が、さっきの出会いというわけやあるまい？」

「うん、そらそうや。あねん他の人が仰山居てるなかでは、めったな事は言えぬさかい。けど、わしは孝やんにも度胸をきめて、じつとまぢえの顔を見て欲しかつてン。」

そうすりや、どっちの借りが大げか、まぢえもきつと気がつくやろ思うてな。そうかて、わしが貸し借りがあるみたいな氣イするんやから、まぢえもやっぱりいくらかそんな氣イしてるにちがいないで。」

孝二はどきつとしてその場に足が竦んだ。ではまぢえ

は、心の貸し借りが清算したくて、あの賀状をよこしたのだろうか？

「それにしても思わぬ場所^{ところ}で会ったもんや。ひょっとしたら、とは思ってたけど、まさか、あないにひょっとするのは考えなかった。孝やんはどうけ。家を出しなに、むいの知らせでもあったけ？」

「いいや。」

孝二はわずかに答えた。

「でも、うしろ姿だけでもおがみたいと思うて出てきたのはたしかやろが？」

「いいや。」

「そんな負け惜しみ、言わぬとき。」

「いや、負け惜しみで言うてるんやないネ。わし、ほんまにそんな偶然みたいなもん、あてになかったで。」

「そいじゃ孝やんは、まぢえに会えるとも、また会いたいとも思うてなかったのけ。」

「いいや、会いたいとは思うてた。」

「すると、ばったり出会^{あひま}す偶然なんか無いて思いながら、一方では会いたいと願うてたわけ？」

「まあ、そうや。でも、そこが祇園のたのしみやないけ。もし顔を見るだけが目的なら、わし、まっすぐ学校へ行くがな。」

「なるほど、やっぱり孝やんらしいワ。孝やんが追うてる

のは恋の幻やからな。ところが先刻^{さっき}、ばったり実物に会ったもんで、孝やんはびっくりして、ものも言わぬと逃げてしもた。そうやろが？」

孝二は口を噤んだ。まぢえから逃げ出した本当の理由を孝二は打ちあけたくなかった。もし打ちあけようものなら、貞夫は激しく言いつのるにちがいない。

「まぢえの視線に晒される思いがして堪えられないなんて、それは『小森』うまれのひけめを持つてゐるからや。孝やんがそんなことで、あとの者はどないするネ。しっかりせぬかい。」

さて、町の通りは行くほどに人足が繁くなる。正太と熊夫は店々をのぞき込むのにせわしく、孝二や貞夫の存在は忘れたようだ。わりもない。さまざまな商店、いろとりどりの商品。それを眺めるのが、二人には祇園の意義の大半なのだ。

「だけど孝やん、もしかしたら、まぢえはもう子供の頃のことはずっきり忘れてしもてるかもわからぬなア。それを、わしだけ根に持つてるとしたら、こら、阿呆のくちや。」

立ちどまって貞夫が言った。ちやうど時計店の前で、正太と熊夫は飾窓にはりついている。町で一番ハイカラだといわれるこの店の飾窓には、文字通り人眼を奪う光輝燦然たる品々が並んでいた。